

臨牀解剖実習の想文

臨牀解剖実習では、多くの学びや新たな発見があり、大変濃厚で有意義な時間を過ごした。私に在って、授業を受けているだけであったり、教科書を見ただけであったりでは、身につけることのできない人体の構造を自分の手で実際に触れて、自分の目で確かめることにより深い理解を得ることができました。そのような体験のなかで、人体の構造の多様性や神秘さ、解剖学の奥深さを改めて新鮮に感じました。人がいかに複雑で、かつ、絶妙にバランスのとれた構造のもとで成り立っている存在なのかと、生命の奇跡や尊さに胸が打たれました。

実習中、多くの学びがありました。中でも心臓の構造について、1年生で解剖した際には、曖昧だった点が一層観察させてもらったことで、理解が進みました。また、腹腔鏡による解剖では、あれほどの小さな傷から、臓器にたどりつくことができると知って、感銘を受けました。前回の解剖学実習では、人体の構造を見るだけだったけれど、より臨牀的なアプローチを知り、日々執刀しておられる先生方の手技を身近に拝見でき、勉強になりました。一方で、同級生がよく勉強している姿を見て、自分の不甲斐なさを痛感し、勉学に邁進することを決意いたしました。

私は、三年と半年の学校生活のなかで、医学の圧倒的に膨大な知識に打ちのめされそうになったり、必死に試験を乗り越えようとしているうちに、医学生としての在り方を考えたり、医師という職業における果たすべき責任について考えたりすることが疎かになっていったこと、この授業を通じて、気付かされました。そればかりか、日々の生活に慣れてきてしまったことが良くない方向へと働き、勉強において交力率を求めあきらめたり、妥協点を探してしまっている点に気付きました。このような気付きから、普段の生活を見直し、周囲の環境や雰囲気にならななく、立派な医師になるという目標に向かって進もうと心に刻みました。私は、勉強しているうちに、病氣についてばかり目を向けるようになってしまっていたけれど、それぞれの人には、それぞれの人生があって、

ご家族がいらっしゃるということをおれすに、精進していきたいと思っております。

先生が、もうすぐ病棟に出ることになっていて、その際、身ぶりがよくないような態度をとるようになり、とおっしゃったとき、自分は、まだまだ二人になにも薄い知識しかないので、もう病棟に出る時が迫っている。医師になる覚悟も中途半端なままであったのかと、情けない気持ちになり、襟を正しました。解剖学実習は単に、解剖を学ぶだけでなく、私たちがたった一人を学んでいるのかではなく、周囲の人に支えられて勉強ができていく状況であり、その分の恩を返さう、社会的な責務を背負っているのだと考える機会になりました。

最後に、今回の実習を行うにあたって、南大身体をしてくださった方をはじめとして、ご遺族の方々や、熱意ある指導をしてくださった先生方へ深く御礼申し上げます。この貴重な経験から、知識だけでなく、医学に対して真摯に向き合う姿勢や医師という職業の責任の重さについて学ぶことができました。皆様の次世代の医療への期待を裏切らないよう、これから一層学業に励んでまいります。